

るもあって、失敗をするとその自信はすぐにしぼんでしまう。ところが、「根拠のない自信」には、もともと根拠がないのだから、何も失うものはない。

「根拠のない自信」が必要な

保護者の広場

学び伝えたい事

三年保護者

中村 梨沙（かえで）

去年のゴールデンウィーク、毎年行っている横浜の祖父母の家。去年は祖母の体調があまり良くなく、負担をかけないようにと行くのをやめてしまいました。

まさかその数日後に祖母が亡くなってしまおうとは、その時、夢にも思っていないませんでした。

私の祖母は何でも挑戦してみる！やるからにはなんでも究める！究めても、さらにどうしたらもっと良くなるのかを自分で考え、追求していくような努力家でした。

理由に理論的なものはない。けれども、誰もが緊張する大一番で、少なくとも失敗したかどうか、うまくいかないかもしれないといった委縮した気持ちにならずにすむことは大切なことだと思う。

そしていつかは祖母のような子どもたちから憧れられる素敵な人になれるよう、日々努力することを忘れずにいたいです。

進んでやること

二年保護者

飯田 陽子（麻裕）

中学二年生になった娘は、平日は部活や勉強に追われ、休日は家でくつろいでいることが多い、手伝いはたまにしてくれる程度です。

しかし、「学校では進んで人の手伝いをしてくれて助かります。」と、家庭訪問の時に先生から聞きました。学校では家とは違うんだなあ。と、話を聞いて嬉しく思いました。

学校では、友達や先生方と楽しく過ごしていることが家での発言から分かり、学校が「楽しい場所」であることを嬉しく思います。家ではやらないことを、学校で進んでやるということ、本人にとって学校は多くなを学ぶことができる場所なのだと思えます。理想を

言えば、家でも文句を言わず、進んで手伝いをしてくれると嬉しいな...と思えます。

この先、嫌でもやらなければいけないことがたくさんあります。逃げることは簡単だと思います。しかし、学校だけでも、自分から進んで、人のため、自分のために行動し、人として成長してもらいたいと思います。親として見守っていきます。

チャレンジ

一年保護者

安藤 玲子（璃奈）

「中学生になったら、卓球部に入り、部活動を頑張りたい。」と、娘は言いました。

脳性麻痺と診断され、目の前が真っ暗になり、涙を流したあの日から、はや十年。皆と同じように生活できたことに感謝です。

左半身の力が弱いので、リハビリにも通い、左右のバランスを必死にとろうとして、左をかばった身体には、大きな負担がかかり、痛みを耐えながら頑張つて

きました。

人間の身体は、使えない部分があっても、工夫して何でも補ってやってみよう。

娘に当てはめると、左手がうまく使えなくても少々時間はかかりますが、紐を結ぶことができます。

水泳教室のテストでは、うまく泳げず何度も不合格。友達との差は広がるばかり、悔し涙を流しても、諦めずに頑張り続けて合格しました。

中学生になった今、卓球を楽しむながら、選手になれるように、一勝できるように、娘のチャレンジを見守り、応援していきたいと思えます。

